3-8 関東・東海地域における最近の地殻傾斜連続観測 (1986年5月~10月)

Recent Continuous Measurements of Crustal Tilt in the Kanto-Tokai Area (May - October, 1986)

国立防災科学技術センター National Research Center for Disaster Prevention

前回に引き続き,孔井用傾斜計による地殻傾斜の連続観測結果について報告する。観測点の 配置及びブロック分割(I~V)を第1図に示す。傾斜計2成分は通常真北と真東に設置して あるが,特に深層3井(IWT,FCH,SHM)及びCKRの2成分(X,Y)の設置方位は第2 図に示す通りである。各観測点における傾斜毎時値及びブロック毎の代表点の日降水量を,プ ロック別に第3図に示す。

この期間に特筆すべき事として,6月24日の房総半島沖の地震(M_{JMA}=6.5)に先行して観 測された異常傾斜変化があげられる。防災センターの観測によれば,この地震は11時53分に 発生し,その震源は34.84°N,140.71°E,深さ58kmであった(詳細は本巻別報を参照されたい)。 震央から約70kmの距離にある房総半島南端の観測点CKRでは,この地震(第3図星印)に 先行して6月18日頃からドリフトの傾向が地盤X下り・Y上りに急変していたこと(第3図 折れ線?印)がわかった。18日から24日の地震に至るまでの傾斜変動量は、地盤N25°E下 りで変化量は0.4マイクロラジアンであった。この観測点の傾斜計は、泥岩層(千倉層群)中 の深さ732mにセメントで埋設されている。降水や気圧に対するレスポンスはかなり小さいこ とがわかっているので、18日からはじまった傾斜の急変はこの地震に関係していた可能性が 大きい。なお、震央から55kmの観測点KTUでは、ふらつきが大きいために、この時期に地 震に関連した異常な変化を指摘することは難しい。

(佐藤 春夫)







第2図 2軸式傾斜計の設置方位 Fig. 2 Orientations of biaxial-tiltmeters.







-147-





-149-



-150-







-153-



Fig. 3 (Continued)







第3図 つづき Fig. 3 (Continued)